

【登場人物】

タケシ

先生①（東先生）

先生②（西川先生）

先生③（北島先生）

ミナミ

ミナミの母

女子生徒（泣き女）

その他 行列の人たち 女子高生たち 男子高生たち 校長

シーン（ラーメン屋の行列）

長い長いラーメン屋の行列。老若男女多種多様の人々。

かなり長時間待たされているのか、イラつきぎみである。

それぞれ思い思いに話をしたり、スマホをいじったり。

とにかくそれぞれに時間をつぶしている。待っている。

そこに、一人の女が通りかかる。

列の中の女（以後、列女） あ、サキ

通りかかった女（以後、通女）（気がついて） あれ、ユミじゃん。

列女② やだー、どうして。

列女① ひさしぶりー。

通女 ちょっとこっちに用事っていうの、ちょっとあつてエ。

列女① そうなんだ。

通女 並んでんだ。

列女② チョー待ってる。

列女① もう、サイアク。

通女 このラーメン、マジ、ウマイんだよね。アタシも食べてこうかな。

列女② あ、じゃ、ここ入りなよ。

通女、列の中に当然のように割り込みする。

行列の雰囲気が一瞬変わる。

が、女二人まったく気にしていない。

列女① 用事は大丈夫なの。

通女 あ、ゼンゼン平気。(メールを入れだす)

店から数人の客が出てきた。客「ウマかった」など、
満足の様子。行列の客の一変し、そちらに傾く。

通女 (メールを打ちながら) もうすぐじゃん。

列女① チョーハラへった。

行列の雰囲気、元に戻る。

が、後方に位置する男(タケシ)はただ一人、先刻の女たちを睨みつけている。

タケシ オイツ、あんたら。

一人の男が振り向く。

タケシ 違う。あんたじゃない。オイ、あんたらだよ、あんたら。

違う男が振り向く。

タケシ 君はあんたらか？おい、お前らだよ、さっき割り込みしたユミだとか何だとか。

女三人 ……。(気づくが振り向かない)

タケシ みんな並んでんだぞ。ずーっと並んでんだぞ！ ずるいと思わないのか？

女三人 ……。(無視を決めこむ)

タケシ このヤロー、無視してんのか、こっち向けよ！

女三人 (バッカみたいとか死ねとか)

タケシ お前らズルイ！ 退場！ 退場!!退場!!(大騒ぎをする)

さらに違う男 ウッセーよ。静かにしろよ。

タケシ !!

女三人 (ザマーミロとかバカとか)

タケシ (列から出て行き、女たちの所へ行く。一人の女の腕をつかみ) 出る。

女 チョッ、何すんのやめてよ。

タケシ 出なさいって。一番後ろに並ぶべきだ。(引っ張る)

女 チョッ、やめてよ、ヘンタイ。

タケシ ハジを知れ、ハジを。

女 はなしなさいよ、ケーサツ呼ぶわよ。

タケシ オー、警察でも何でも呼んでもらおうか。

タケシ、女たち、すったもんだする。

列の中の声① いつまでやってんだよ。

タケシ エッ?

列の中の声② もういいかげんにしなよ。

タケシ 何だって。

列の中の声③ しつこいんだよ。

タケシ 誰だ?

列 ……。

タケシ 正々堂々と発言しろよ。

列 ……。

タケシが後ろを向くと

列の中の声④ バカ。

タケシ お前ら、みんな卑怯だ!

列 ……。

タケシ、自分の場に戻ろうとするが、そこはすでに詰められてしまっている。

タケシ …あれっ… オレ、ここ、

列 ……。

タケシ たしか、ココ、

列 ……。

タケシ 空けるよ。オレ、ここに並んでただろ。

列 ……。

タケシ 入れろって。(無理やり入ろうとする)

列、何としても入れない。

タケシ アーーーーー!!!

― 暗 ―

シーンロ (生徒指導室)

机をはさんでタケシと東(東)が座っている。

タケシは包帯やらバンソウコウやら貼っている。

先生① (以後、東) それでお前、暴れちゃったの。

タケシ ハイ。

東 ラーメン屋の前で。

タケシ ハイ。

東 駅東の。

タケシ ハイ。

東 ラーメン屋の前で。

タケシ ハイ。

東 あのな、お前、本当に反省してる？

タケシ ハイ。

東 (独り言のように) ホントは全然反省してないんじゃない。

タケシ ハイ。(まずいと気づき) ……あっは

東 (ため息) 来来軒だったっけ。

タケシ 間違ってます。極楽軒です!

東 そんなのどっちだっていいじゃないか。

タケシ よくありません。

東 だって、お前、暴れちゃったんだろ。
タケシ ……。

東 ……あのな、お前高校生だからいいようなものの、社会人だったら、れっきとした犯罪だよ。分かる？

タケシ ……でも、

東 でもじゃない、犯罪なんだよ。

タケシ ですが、先生。

東 犯罪。

タケシ ……。

東 犯罪者。

タケシ ……。

東 犯罪人。

タケシ ……。

東 ホンザワ、一つ言っていていいか。

タケシ ハイ。

東 私は生徒指導の東だ。

タケシ それは分かっています。

東 ヒガシと書いてアズマと読む。(手で書く)

タケシ 書き順が違ってます！

東 お前は どうして そうなんだ。私はね、五十一年間、これで通してるんだ！

タケシ ……。

東 どんないかん、たとえばこんな理由があったにせよ、暴力はいかん、絶対にいかん。

タケシ はあ、でも、…どっちかって言うと、よってたかってやられたのはオレで、確かに大声を出しました、でも、

東 お前だって、手出して暴れたんだろ。

タケシ ……はい。ですが先生、やっぱりオレ、許せません。割り込みしたオンナも、大勢の中から分からないように悪口言う奴も…オレには許せません。

間

東 たとえばここにチワワがいる。あんまりかわいいんで、子猫ちゃんと呼んでしまった。そういうことだよ。

間

タケシ さっぱり分かりません。

東 あのな、ホンザワ、

そこに先生②（西川）が入ってくる。

西川 先生、ちょっといいですか。

東 何？

西川 北島先生が早急に相談したいことがあると。

東 何だろ。

西川 クラスの女の子のことで、何か問題があったとかで、早急にと。

東 ……ん。

西川 ホンザワタケシは私、担任ですから、私の方から指導しておきます。

東 分かった。（立ち上がって）（タケシに）もう少し、頭冷やしとけ。（西川に）じゃ、

西川先生、あと、よろしく願います。

東、去る。と、西川の態度が豹変する。

西川 タケシ、また暴れたんだって！

タケシ ……ハイ。

西川 ーでラーメン屋の前でケンカなんかしたの？

タケシ それはさつき東先生に話しました。

西川 生徒指導は生徒指導。私は担任として、あなたの口から話を聞きたいわけ。

タケシ 割り込みとか、卑怯な悪口とか許せなくて、

西川 あまりにもしょっちゅうすぎるんじゃない。

タケシ まあ。

西川 分かってるの！

タケシ ……ハイ。

西川 この前だって、テストの時間、馬場にいきなり襲いかかってケンカしたでしょ。

タケシ あれは馬場がカンニングしてたから。

西川 昇降口で猪木に襲いかかったのは。

タケシ あいつ、土足で上がっていったんです。

西川 ムサシは。
タケシ 掃除さぼったから。
西川 マサトは。
タケシ それをチクったから。
西川 遠藤は。
タケシ あいつ、教室に塩をばらまくんです。
西川 友達無くすよ。
タケシ いません。
西川 ……あのさ、タケシの言ってることは、ある意味正しい。間違っているのは相手の方かもしれない。
タケシ 先生。
西川 だけどそいつらに制裁を加える権利が君にはあるの？そんな権利どこにあるの？スーパーマンだったら分かるけど。
タケシ スーパーマンならいいんですか？
西川 そういうわけじゃないけど、それに、あんた、スーパーマンじゃないでしょ。ま、バンブーマンてこかね。
タケシ バンブーマン㊦。
西川 タケシのタケでバンブー。かつこ悪い。
タケシ ……バンブーマンかぁ。
西川 とにかくあんたに制裁を加える権利なんかないんだからね。
タケシ 分かってます。分かってるんですがオレ、そういうのを見るとオレ、頭に血がのぼって、
西川 「まあいいか」って思えない？
タケシ とても思えません。
西川 落ち着いて、深呼吸してから、（深呼吸する）「まあいいか」って。……やってみて。
タケシ （深呼吸して） まあいいか。
西川 やればできるじゃない！ ……じゃ、こんなことしたら。（机にペンで落書きする）
タケシ アツ㊦。
西川 ホレホレホレ（グリグリ書く）
タケシ ……ア、ア、ア、
西川 さあ、タケシ、言うのよ。
タケシ ……。
西川 深呼吸！
タケシ （深呼吸する）

西川 今だ！
タケシ まあ……。
西川 どうしたあ。
タケシ まあ、
西川 ネクスト！
タケシ ……いいか。
西川 続けて！
タケシ ……ま、まあ、い、いいか。
西川 やればできるじゃない！ じゃ、次のステップよ。ここに、ガムがあります。これを、
噛む。(タケシを見なが挑発的に噛む) (そして) ペツ。(床に吐き捨てた)
タケシ あっ!!
西川 (さらに挑発的にタケシを見ながら、床に踏みつける) フツ。(鼻で笑う)
タケシ ……なんてことを!!
西川 ハイッ、そこで深呼吸！
タケシ ぬうー。(深呼吸する)
西川 さあ、言うのよ！
タケシ (目が座っているが) ま、ま、ま、まあ、い、い、い、いか。
西川 やればできるじゃない！ じゃ、次のステップよ。
タケシ (ハアハア言いながら) ま、まだやるんですか。
西川 克服するのは今しかないの！ここに、おばーちゃんがあります。(一人芝居をする) ところがおばーちゃん足が悪い。そこでゆっくりゆっくりと歩く。そこに若い男が通りかかりドントッ、ペチャ。(倒れるが、今度は男になり) トロトロあるいてんじゃねエよ。ババア。
タケシ おいっ！ お前。
西川 あんだ コラア。
タケシ おばーちゃんに謝りなさい！
西川 んだと、コラ、やるのか。
タケシ おくま〜え〜わ〜。
西川 ハイッ！ 深呼吸!!
タケシ くぬう……。 (胸を掻きむしり悶絶する)
西川 そこで一言！
タケシ ままままあ、
西川 さあ!!

タケシ み、み、み、みむむむむ。

西川 違う方向に行ってるわよ！戻ってきて！カムバック!!

先生③（北島）が教室に入りかかるが、まともではない様子を見て呆然とする。

タケシ めめめめめめ。

西川 危険！変身!!（婆）あたしはおばーちゃん。

タケシ ももももも、大丈夫ですよ、おばーちゃん。

西川 （へたり込みながら）密室で行うには危険すぎるプレイね。

北島 どういうプレイなんですか？

西川 北島先生……あの、見てらっしゃったんですか？

北島 ええ。

西川 ……あの、いつごろから。

北島 先生が変身されるあたりから。

西川 ……。あの、このコが立ち直るためのエクササイズをしていたところなんです。アハハ、

……ハ、……ハ。

北島 またお前か。

タケシ ……。

北島 まだお取り込み中ですか。

西川 すべて終わりました。

北島 そうですね。（手招きして）このコ、ちょっと入れといていいですか？

女子生徒（ミナミ）が姿を現す。

西川 もちろんです。

北島 じゃ、入って。

ミナミ ……。

北島 じゃ、こっちに。ここ、座って。（隅のイスを指す）

ミナミ ……。（座る）

西川 （小声で）さっき、問題が出たっておっしゃってたクラスの子ですか？

北島 （無視して）すぐもどってきますから。（去る）

タケシ ……いやな奴。

西川 北島先生はクールなだけよ。……北島先生に変な女って思われちゃったかしら。

タケシ そりゃそうでしょう。

先生 あたしも、授業あるから。それじゃ、あんたも、東先生が戻ってくるまで、しっかり反省しときなさいよ。（作文用紙の束を出す）

タケシ 何すか、これ？

西川 反省文。

タケシ こんなに書くんですか？

西川 オフコース。自分のどこがいけないのか、どうしたらその悪いクセを直せるのか、しっかり書いてたら足りないくらいよ!!

タケシ ……。

西川 それじゃ、しっかりやるように。（去る）

タケシ （作文用紙を放り出し、バラまく）

西川 （戻ってきて）ちゃんと考えて書くのよ、いい。

タケシ （あわててかき集めながら）ハイ。

西川 （去る）

タケシ （出口に向かって）ヒステリーババアが。

西川 （戻ってきて）その娘にちよっかい出したら承知しないからね。

タケシ あたり前じゃないですか。

西川、去る。残された二人。タケシ ミナミの存在を意識しつつも沈黙が続く。

ミナミはうなだれたまま、長い間の後、

タケシ 二年生なんだ？ ……オレ三年。

ミナミ ……。

タケシ 三年。

間

タケシ 担任、北島なんだ。アイツ、インケンだよね。

ミナミ ……。

タケシ オレ、西川先生。さっきまでいた、体育の。

ミナミ ……。

タケシ そんなに落ち込まなくて平気だから。

ミナミ ……。

タケシ 学校じゃ、停学三回で退学させるとか言ってるけど、オレ、もう五回目だから。
ミナミ ……。

タケシ ね、君、何やったの？

ミナミ ……。

タケシ オレはホンザワタケシ。三年四組の。君、名前、何ていうの？

ミナミ ……。

タケシ 名前ぐらい聞かせてくれてもいいんじゃないかな。

ミナミ ……。

チャイムが鳴る。 タケシ、時計を見て、

タケシ もう昼休みか。

廊下はにわかには休み時間の様相を呈する。走る音やざわめきなど。

廊下に数人の女子生徒がたむろっている。

もちろん指導教室の中に誰かがいるとは思っていない。

廊下側の窓はすりガラスになっている。そこに背中をつけるようにして話し込み出した。

女子高生① あの購買のババア、チョームカツクと思わない。ちゃんと釣り渡せつつうの。

女子高生② あたしも前パクられたよ。もう渡したって言いはるから、キレてパンぶん投げちった。

女子高生①・③ (やり過ぎだつつうのバークとか)

窓ガラスが細く開くと教室の中に食べ終わったパンやらおにぎりの包装が押し込まれる。
女子生徒らが入れているようだ。

タケシ !!

女子高生① サキ、こっちも食ってみる？

女子高生② ゲッ、何コレ、チョー旨いジャン。

今度は飲み物のゴミを押し込んだ。

タケシ (やおら窓を開けると) お前ら!!

女子高生①②③ ウワー!! (とかなり驚くが)

女子高生① ちょっと、あんた何すんのよ。

タケシ ここはゴミ捨て場じゃないだろが。

女子高生① 何のこと。

タケシ お前らが捨てたんだ、拾え。

女子高生① 知らないわよ、ねエ。

女子高生③ 知らねエ知らねエ。

女子高生①②③ ねエー。

タケシ うぬうー。人間失格! お前ら人間失格だ!

女子高生 (ミナミに気づき) あれっ? ミナミ? ミナミじゃない? 何やってんの?

ミナミ エっ、あ、うん、ちよつと。何でもないので。

女子高生たち あ、そう、じゃね。(去る)

女子高生① (去りながら) 何やってんだか。

女子高生② さあ。

女子高生③ どうでもいいじゃん。

三人、去る。

タケシ あ、こら、待てー。(後を追う)

女子高生たち ギャー!(逃げる。逃げながら、変態!とか、死ね!とか)

タケシ 日本語くらいきちんと話せ、バカ女!(戻ってきて) : : ったく。

タケシが振り返ると、あろうことか、自転車が廊下を通っていく。

タケシ っこらー、待てー!! コノヤロー、待てったら!! (追いかけて出ていく)

教室に残ったミナミがゴミを拾っていると、男子高校生が二人、話しながら通りかかり、

窓のところで立ち止まる。

男子高生① 自分でベラベラしゃべってんだぜ。

男子高生② それって、アブナクねー

男子高生③ だいたい、あいつ、全然学校来てなかっただろ。何で今日いるわけ。

男子高生② 知らねエ。気が向いたからなんじゃねーの。

男子高生① けっこうムカつかねエ？（飲んでいたジュースの紙パックを部屋の中に投げ捨てる）

男子高生② どーでもいいじゃん。

二人 去る。

ミナミ ……どうでもいいじゃん。…か。

ミナミ、生徒たちが捨てていったゴミを拾い、ゴミ箱に捨てる。

ロッカー上にあるサボテンに目をとめ、黙って見つめる。

タケシ、もどつてくると、すでにゴミは片づいている。

タケシ ったく、とんでもない奴らだ。（ミナミに）ねえ。

ミナミ ……。

タケシ ミナミちゃんって言うんだ。いい名前だね。

ミナミ ……。

タケシ ほら、ヒガシとかニシとかキタとか、南西とか 北東とか南南西とか東北東とか…。

ミナミ ちよつと。

タケシ エッ。

ミナミ （少し笑って）何言ってるの。

タケシ やつとしゃべってくれた。何か、ハラへったな。そうだ、オレ、パン持ってた。（カバ

ンの中から出す）君も、ミナミちゃんも食べる。

ミナミ ……。

タケシ 一人じゃ、何だからさ、一緒に食べよう。（ミナミを近くに座らせる）

ミナミ いいよ。

タケシ どっちがいい？

ミナミ ……甘い方がいい。

タケシ じゃ、オレ、コロッケパン食べるから。（席について食べる）

ミナミ ……。（食べようとしな）

タケシ 遠慮しなくていいよ。

ミナミ （パンを少しかじる）……おいしい。

そこに、一人の女子生徒（泣き女）が飛び込んでくる。

泣き女 ブヒーッ。ウエツウエツウエツ……。 (部屋の隅で泣く)

ミナミ (びっくりして) 何？

タケシ (平然と) かまわねエ方がいいよ。

ミナミ どうしたの？

タケシ 大丈夫、気が済むだけ泣いたら出てくから。

ミナミ 何で？

タケシ 三年じゃ有名だよ、一組の泣き女。

ミナミ 泣き女？

タケシ 一日二回はこの部屋に来て泣かないと、気が済まねーんだよ。

ミナミ どうして？

タケシ 知らないよ、趣味なんじゃないの。

ミナミ ……。

泣き女 (すすり泣く) (淋しそうに泣く) (苦しそうに泣く)

タケシ (泣き女に) オメーは早く出てけよ。邪魔なんだよ。

ミナミ そんな言い方しなくても。

タケシ 甘えてるだけなんだよ、コイツは。オラ、出てけ。(出そうとする)

泣き女 (いやいやしながら泣く)

タケシ 言いたいことがあったら、はっきり言えよ。はっきりと。

泣き女 (泣く)

タケシ オメーはそうやって現実から逃げてるだけなんだよ。

泣き女 (なおも泣く)

タケシ もういいから出てけホラ、出てけよ。強引に出してしまう)

間。

ミナミ ……さっきのことだけど。

タケシ さっきって。

ミナミ あの人。

タケシ 泣き女のこと？

ミナミ 現実から逃げてるって言ってたけど、違うと思う。

タケシ 違うって何が。

ミナミ 泣くしか方法がないのよ！

タケシ ……なんだよ、急に？
ミナミ 学校なんて、そんなトコでしょ。
タケシ ……。

間。

タケシ 言い返すわけじゃないけど。
ミナミ 言い返そうとしてる。
タケシ ……。

昼休み終了のチャイムが鳴る。いつしか廊下の混雑は消えている。

間。

そこに東とミナミの母親らしき女性がやってくる。
後ろには北島がいる。

東 どうぞ。

母 (会釈して入ってくる)

東 タケシに) あれっ、お前まだいたの？

ミナミ ……お母さん。

母 ミナミ、あんた何やったの。

ミナミ ……。

東 ま、それは、あとで。

タケシ ……。

東 タケシ、お前はもういいから教室にもどっていなさい。

タケシ もういいって？

東 いいから。

タケシ ……でも、

東 いいから行きなさい。

タケシ、しぶしぶ出て行く。

東　じゃ、どうぞ、おかけになって下さい。

四人机に向かい合って座る。

重苦しい間。

そこにタケシがもどってくる。

タケシ　（ノックをして顔をのぞかせる）

東　何だ。

タケシ　あの、ちょっと、カバンを忘れちゃって、…いいですか？

東　早くしなさい。

タケシ　（入ってきてカバンをとる）…あの、

東　何だ。

タケシ　いえ、何でもありません。…失礼します。（去る）

再び、重苦しい間。

東　まあ、あれですね。

母　…はい。

廊下で派手に転ぶ音がする。

タケシ　あ痛っ!!（ドアを開けて入ってくる）

東　今度は何なんだ！

タケシ　ちよつと転びまして。

東　そんなの関係ないじゃないか。

タケシ　パンとかゴミとか片づけないで出てきちゃったもんですから。（片づけようとする）

北島　お前、いいかげんにしなさい。

タケシ　すぐ片づけますから。

北島　そんなもん、どうだっていいから、早く出て行きなさい。（タケシを出そうとする）

タケシ　（抵抗して）すぐ済みますって。

北島　…。

タケシ ……とここで、彼女、ミナミさんでしたっけ、いったい何を。

東・北島 お前には。(思わずハモってしまった。バツが悪そうにする)

東 関係無いことだ。

北島 早く出て行け。(追い出そうとする)

タケシ 分かっていますって。

北島 二度と入ってくるな。

タケシ、出て行く。

北島 ……まったく……どうしようもない奴だ。(席にもどる)

東 申し訳ありません。

母 ……いえ。

その時、再び廊下に人の気配がする。北島、立ち上がる。

廊下の声 ヘーツククション。(大きくしゃみをする)

北島 (たまらず出て行って) いいかげんにしろ!!

が、そこには校長が立っていた。

北島 へ こ、こうちょー。

校長 何をいいかげんにするの、北島先生?

北島 あ、いえ、あの、すいません、……その、人違いです。

校長 あんまり大きな声出さないでね、最近臆弱ってるんだから。(去る)

北島 ……はい、すいません……。

ミナミ (嘲笑する)

北島 (ミナミを睨む) ……。(席にもどってくる)

東 実はですね、今日、お母さんをお呼びだしたのは、他でもないミナミさんのことなんですけど。

母 ……あの、うちの子が何か。

東 ええ、そのことなんです、ちょっとこの手紙をご覧になって下さい。(四角く折り畳まれた紙を渡す)

母 ……ハア。……(広げて読み始める)

東 担任の北島先生がミナミさんから取り上げたものです。

母 (ある一点で目がとまる) !!

北島 ちょうど、私の授業中だったものですから。

母 ……これ、まさか………

北島 私も何気なく目を通して愕然としました。

その時、廊下の窓がわずかに開いて、タケシが顔を出す。

母 まさか、あんた、うそでしょ！

北島 私も悪い冗談かと思って、ただ内容が内容なだけに黙って見過ごすこともできなくて。

……で、本人に確かめたんですが。

東 どうやらそうらしいんですよ。……書いてあること本当のようなんです。

母 まさか、まさかあんた、子どもができたって。

ミナミ (笑う)

母 何がおかしいの！

タケシ、思わず物音を立ててしまう。

皆の視線が廊下に向かう。

タケシ (廊下を歩き、校長の真似をして) ヘーックションチキショウ。

北島 ……何だ、また校長か。

母 ウソでしょ！ね、どうして、どうしてなの？

ミナミ ……。

母 お母さん、誰のために働いてると思ってるの？恥ずかしい！！

東 まあまあ、お母さん、落ち着いて、落ち着いて下さい。

母 ……相手は誰なの？あんた、母さんにそんなこと一言も相談しなかったじゃない。

東 まあまあ。

母 まさか、ひよつとしてさっきの子？ そうなの？

東 いや、タケシは違います。……とにかくですね、まず落ち着いて下さい。順を追って話していかないと、ね。

北島 実は我々も詳しい事情はまだ何も分かってないんですよ。ただ、これにある通り、妊娠という重大な事実だけは本人に確認したわけで。で、とり急ぎお母さんに来ていただきたいわけですから。

東 ま、本人の今後のことも考えながら、慎重に話をしていかないと。いいですね、お母さん。

母 ……はい。

東 ちなみに、お父さんは、今日はお仕事でしょうか？

北島 東先生、それは。（目配せする）

母 （察して）主人はこの子が中学生の時に……亡くなったものですから。

東 そうですか。

ミナミ 違うでしょ。

母 ミナミ！

ミナミ 別れたって、はっきり言えばいいでしょ。

母 ミナミ！……すみません。

東 （ミナミに）で、もう一度確認するけど、本当なのかな。

ミナミ ……。

東 相手は誰なのかな。

ミナミ ……。

北島 出会い系サイトで知り合ったのか。

ミナミ そんなじゃありません。

北島 じゃ、ちゃんと答えなさい。

ミナミ 私の一番大切に、一番大好きな人です。

北島 それじゃ答になってないだろ。

ミナミ 何でそんなこと話さなくちゃならないんですか。

東 君が妊娠したということは、君だけの問題じゃない、相手にも責任があるんだ。

ミナミ 先生たちにまで話さないといけないんですか。

北島 そうだ。

ミナミ 何ですか。

北島 お前はこの学校の生徒だからだ。

東 たとえば、ここに一つのヤシの実がある。それをナイフで削って、ストローをし込んで

飲む。……夏の暑い昼下がりに。そういうことだ。

北島 （無視して）ここには、「ターくん」という名前が何度も出てくる。

母 ターくん？

北島 心当たりはありますか？

母 ……いえ。

北島 何か、友人関係とかで、最近変わったことは？

母 ……いえ、あまり。……勤めに出ているものですから。

北島 とりあえずこちらでも調べてみました。(メモを見て) うちのクラスで、タカトシ。他のクラスで、タダシ、タイチ、タスケ。他の学年で、タクロウ、タクミ、タクヤ、タイゾウ。

母 あの、さっきの子はたしかタケシと。

北島 あいつはまったく関係ありません。どうだ、この中にいるのか？

ミナミ ……。

母 お願いだから、ちゃんと話してちょうだい。

ミナミ ……。

東 じゃ、話を変えよう。その相手とは、いつからつき合ってたのかな。

ミナミ 半年くらい前から。

北島 いつから、そういう関係になった。

ミナミ そういう関係って何ですか。

北島 子どもができるようなハレンチな関係だ。

ミナミ 子どもができるってことはハレンチなんですか。

北島 そうだ、ハレンチだ。どこの誰かも分からない。

ミナミ そんなじゃありません。

北島 なら、なぜ名前を言えない。うしろめたいことがあるからじゃないのか？

ミナミ そんなことありません。

北島 お前は自分が悪いことをしたと思ってるのか？

ミナミ 悪いこと？私、悪いことなんか何もしていません！

北島 生徒指導規定を知ってるな？「不純異性交遊をした者は無期停学処分、またその必要性が認められれば方向転換に処す」お前がしたことは無期停か退学なんだ！

ミナミ 私、不純異性交遊なんてしていない！

先生 じゃ、なんで子どもができたんだ。

ミナミ 不純なんかじゃありません！

間

東 たとえばここに、

北島 たとえ話はけっこうです。……高校生が子どもをつくる。これのどこが不純じゃないんだ。どこがハレンチじゃないんだ！高校生がしなくちゃならないことは勉強か？セックスか!!

母親泣きくずれる。

ミナミ ……。

東 まあ、君の気持ちも分からないではないけど、高校生としてはな、やっぱり。

北島 で、どうする。問題はこれからだが。

東 四ヶ月っていうのは間違いないのかな。(紙を見ながら)

ミナミ ……。

北島 どうします、お母さん。このままってわけにも行かないと思いますよ。

母 ……はい。

間

ミナミ ……墮ろせっていうことですか。

東 まあ、あるいはそういうことにもなるかな。

北島 それ以外に何があるんだ。

母 ミナミ お母さんと一緒にお医者さんに行こう。ねっ。

ミナミ ……。

母 その歳で子ども生んでも、世間様の物笑いのタネになるだけよ。せめて高校だけは。

ミナミ ……ひどい。

北島 なにがひどいんだ。

ミナミ 赤ちゃんは生きてるんです。それを殺せって言うんですか！

北島 被害者ぶるな！高校生の分際で男と遊び、あげくの果てに子どもまでつくって！！

東 北島先生、

北島 一つの大切な命をもてあそんでいるのは、オレか、お前か？言ってみろ！！大切な……大

切な命を無駄にしようとしているのは、オレか？お前か？言ってみる！！どうなんだ！！

東 北島先生、

黙って話を聞き、我慢していたタケシが思わず窓から入ってくる。

全員 へ

北島 何だお前は！

タケシ 正義の味方、バンブーマンだっ！！

北島 何をしているんだ、出てけ!!

タケシ さつきから話を聞いていけば一方的なことばかり。

北島 お前とは関係ない事だ。

タケシ 子どもをつくることはハレンチなことなのか？じゃ何であんたはここにいて？そこいら

歩いてる妊婦さんは全部ハレンチか？世の中にいるお母さんは全員不純なのか！

北島 何を言ってるんだ。（タケシをつかまえる）

タケシ （抵抗して）あんたが言ったんだろ。ミナミちゃんの言うことも聞かずに、あんたが

一方的に言ったんだろ！

北島 屁理屈をこねるな！出て行け！

タケシ 出ない！

北島 出て行くんだ。

タケシ 放せよ！

東 やめなさい。（二人を引き離す）

母 やっぱりこの人がそうなんですか！そうなんですわね!!

東 いや、だから、こいつは、

タケシ バンブーマンだ!!

北島 出ていけ。（力づくで出そうとする）

タケシ （抵抗して）どうして決めつけるんだよ。高校生だって、本気で人を好きになることが

あるだろ！（暴れる）

そこに西川が通りかかる。中の異変に気づいて、

西川 （ドアを開け） あんた、何やってんのよ、タケシ！

タケシ バンブーマンだ！

北島 ちよっと、西川先生、こいつどうにかして下さい！

西川 やめなさい、タケシ！

タケシ 先生、オレ、許せません！最初から一方的にミナミちゃんが悪いって決めつけて、子ど

も堕ろせだ？人のことだから、そんな簡単に言えるんだろ!!

北島 何だと、キサマー!!

北島、タケシをつかまえて投げとばす。

タケシ ……。

西川 北島先生、やり過ぎでは、

北島 正義の味方だと？とところかまわずふりまわすお前の正義は、まわりには大迷惑なんだよ！

タケシ うあああ!! (再び暴れようとする)

東 いいかげんにしないで!!

全員 ……。

東 タケシ、頭を冷やしなさい。北島先生も。

タケシ・北島 ……。

西川、ミナミ・母を座るように促す。二人座る。

東 (ミナミに) たとえば君の将来を考える。よく考える。世の中はひとすじなわではいけない。わかるね。君自身がよく考えて、君自身が決めることだよ。

問。

ミナミ ……学校、やめます。

母 あんた、何を。

東 本当にいいのかな。

ミナミ (うなづく)

東 誰かが不幸になっても？

ミナミ ……今は、分かりません。

東 うん。そうか。

北島 ……東先生

東 お母さん、もう一度よく話し合ってみてください。

北島 ちょっと、東先生、いいんですか。

ミナミ お世話になりました。さようなら。(出て行ってしまおう)

北島 あっ、ちょっと待て、沢口。(追う)

母 あ、あの、それじゃ、今日のところは。(追いかける)

指導室の中にはタケシと東・西川が残る。

タケシ 何で行かせちゃったんですか！

東 引き止めればよかったのか。お前の自己満足のために。
タケシ ……そんなんじゃ、
東 タケシ、座りなさい。
タケシ ……。(座る)
東 お前は、北島先生に子どもがいないのを知っていたか。
タケシ エッ?……いえ。
西川 北島先生って結婚なさってたんですか?
東 先生は今年転任されてきたから知らなかったかな。北島先生は結婚されてからもうかれこれ一〇年以上になる。
西川 ……シヨック。
東 奥さんが一度流産されて、それきりお子さんにめぐまれていない。
タケシ ……そうだったんですか。
東 小さな命を誰より望んでいるし、その命の尊さを誰より分かっているんじゃないかな。
タケシ ……先生、オレ、
東 タケシ、私はね、お前の純粋さをうらやましく思う。と同時にそれゆえの傲慢さを憎いとも思う。
タケシ ……。
東 実はな、私は何が正しくて、何が正しくないことなのか分からないんだ。恥ずかしい話だが、この歳になっても。……そういうことだよ。
タケシ・西川 ……。
北島 (戻ってきながら) ったく、なんて親子だ。(杲然としているタケシを見て) 出て行け!
タケシ ……。
北島 出て行け! (タケシの襟元をつかんで出そうとする)
東 (止めて) 北島先生、もういいんだ。私の方から話しておいたから。
北島 ……。
東 じゃ、西川先生、あとよろしくお願いします。(去る)
北島 ……。(去る)
西川 タケシが少し、オトナになること、期待していいかな?……しっっかり反省文書いておきなさい。(去る)

間。

そこに泣き女が飛び込んでくる。
いつものように部屋の隅で嗚咽する。

泣き女 ウツウツウツウツ。

タケシ ……。

泣き女 ウエツエツエツウツ……。

タケシ ……泣くなよ。

泣き女 ウエツ？（頷いて）ウエウエウエツ。（泣く）

タケシ ……だから泣くなって。

泣き女、泣きながら去る。

シーンⅢ（生徒指導室 その日の夕刻）

窓から西日が差し込んでいる。

タケシ、反省文用の作文 用紙の束を前に物思いにふけるかのように座っている。
すると、廊下からBGMが近づいてくる。

扉が開くと、そこには西川が、CDラジカセを持って立っている。

西川 あんた、まだ反省文終わんないの、もう校舎閉めるよ。タケシ まだ、ちょっと。

西川 もう週番の先生帰っちゃったのよ。あんたのせいで、あたしが見回りしなくちゃなんな
くなっちゃったじゃない。

タケシ ……あの、

西川 なに。

タケシ 何ですか、それ。

西川 （カセットを止めて）一人で校舎見回るのが淋しいのよ。けっこう怖いし。

タケシ さびしい？

西川 悪い？

タケシ ……いや、別に悪くはないけど、

西川 あと10分で必ず書き終わらせなさい。

タケシ エッ、だって。

西川 今日はエステ入ってるのよ。

タケシ ……ハア。

西川 三〇過ぎると女はささいなことに心細さを感じたり、肌のハリ一つに不安や恐怖を感じたりするものなの。分かる？

タケシ 分かりません。

西川 ま、あんたみたいなガキンチョには無理かもね。(カセットのスイッチを入れる) いい、あと一〇分でここ出るのよ、ゼツタイ。

タケシ ハア。

西川、BGMとともに去る。

タケシ ……。

そこにミナミが入ってくる。

タケシ ミナミちゃん！

ミナミ ……。

タケシ どうしたの？

ミナミ ……ひよっとしてまだいるかな、と思って。

タケシ オレ！

ミナミ うん。

タケン 何で？

ミナミ ……。何であんなことしたの？

タケシ エッ、

ミナミ 何であんなことしたの？

タケシ ……何でって、オレにもよく分からないけど……。

ミナミ あれ、全部ウソだったの。

タケシ ウソって、エッ！あの、子どもができたって、そのこと？

ミナミ そう。

タケシ (何だかホツとするが、すぐに) 何で？

ミナミ ……。

タケシ そうだ！(出て行こうとする) 早く先生に言わなくっ

ミナミ いい!!

タケシ 何で？

ミナミ いいの、もう。あたし、学校やめるから。

間。

タケシ 何で?……分かんない。……分かんねえよ!ウソなのに何で学校やめんだよ。……ウソなのに、何であそこまで本気でつっぱる必要があるかな!

ミナミ ……あの手紙書いたの、あたしじゃないんだ。

タケシ へ

ミナミ 誰かが書いたどうでもいいような悪ふざけ。

タケシ だったらどうして?

ミナミ ……誰も気づいてくれなかった。

間。

タケシ そんな、だからって学校やめちゃダメだよ!

ミナミ ……。前から学校はやめようと思ってた。今日のことはいいきっかけになっただけ。

タケシ ……ミナミちゃん。

ミナミ ……。何もかもいやになっちゃった。あたしなんかいなくなっても、誰も何とも思わない。……この部屋のサボテンと同じ。

タケシ そんなことないよ!そんなことゼツタイないから。

ミナミ ……。センパイは何で学校に来てるの?

タケシ 何、いきなり。

ミナミ ちゃんと答えて。

タケシ (考えて) 人間が健全に成長するために、すごく重要なトコロだから。

ミナミ 本気でそう思う?

タケシ 本気でそう思う。ミナミちゃんだって、

ミナミ 不思議だね。センパイが言うと、本当にそうなんだって、思える。

タケシ 学校やめて、どうすんだよ。

ミナミ ありがとう、タケシセンパイ。あたしのことなんかで本気になってくれて。

タケシ ……ミナミちゃん。

ミナミ (涙ぐむ) ……あれ? やだな、あたし、どうしちゃったんだろ。……さよなら。(去ろうとする)

タケシ ミナミちゃん。

ミナミ あたしのはあたしにしか分からない。ごめんね。(去る)

タケシ ……あ、ちょっと待って。

追おうとするが、ミナミは走り去ってしまう。

タケシ、のろのろと戻ってきて深呼吸する。

タケシ ……まあ、……まあ、いい……。……いいわけないだろ。（ロッカーの上のサボテンを黙って見つめる）

BGMが廊下から近づいてきて、西川がやってくる。

西川 （カセットを止め、入ってきて） あんた、今、誰かと話してた？
タケシ ……いいえ。

西川 じゃ、ホレ、帰るよ。

タケシ ……先生、この部屋にサボテンがあったこと、知ってましたか？

西川 サボテン？ ああ、あったかもね。

タケシ 先生。

西川 なに？

タケシ オレの書いた字って、分かりますか？

西川 ハ？

タケシ たとえば、手紙、作文とかで、名前がなくても、オレが書いたって分かりますか。

西川 分かるよ あんたの字、特徴あるから。それがどうかしたの？

タケシ いえ、別に。

西川 あんた、おかしいよ。

タケシ ……。

西川 （反省文に目を通す） 自分で読んでみて。

タケシ 反省文。私が正しいと思っただこと、いろんな人とぶつかってしまい、頭に血がのぼり暴れてしまうのは、私の悪いクセです。すいませんでした。私が正しいと思ってやったことが人を傷つけてしまうことがあったり、何一つ役に立たないことがあったりすることに気づきました。……何一つ、役に……。

西川 それから？

タケシ （反省文を握りしめて） ……ミナミちゃんのこと、オレには、何もできませんでした。……オレには、……何も……。……。（声にならなくなる） ……だけど、……だけどオレには東先生みたいな広い考えはまだできそうもありません。（ヒザをつく）

西川 ……ちょっとタケシ、

タケシ 気にしないでください。すぐ帰りますから。

西川 ……そう。分かった。(去ろうとする) あたしはさ、タケシのこと、けっこう好きだよ。
(去る)

ヒグラシの鳴き声が蝉時雨となり、タケシに降りそそぐ。

タケシ ……オレは、オレは、(やおら机に上ると何かに耐えるように屹立する) バンブーマン
だ! ……バンブーマンだ!!

蝉時雨の声ますます大きくなる。

窓からは夕日が差し込んでいる。

小刻みに震えるタケシの肩に逆光となって映る。

— 幕 —